様　式　C－１９、F－１９－１、Z－１９　(共通)

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８H００７７７

研究課題名（和文）大規模自然災害からの生活再建―被災者の移住と社会的紐帯に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）Rebuilding Lives after Large-Scale Natural Disasters: A Cultural Anthropological Study on the Migration and Social Ties of Disaster Victims

研究代表者
李　仁子（LEE, Inja）

東北大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：８０３２２９８１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　9,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、東日本大震災の被災者から、被災前のライフヒストリーや被災後の生活再建プロセスを数次にわたって聞き取った。それにより、津波で従前の生活基盤を根こそぎはぎとられ、その後幾度も移動を強いられた暮らしの中で、被災者がどのような社会的紐帯をどのように維持・再生・再編していったのか、その動態的なありようを個別具体的に跡付けた。さらに、そのありようにはいくつかの典型的なパターンもしくは類型があることを析出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
被災地という局地的異文化の中で幾度も移動を余儀なくされた被災者の生活再建を移住と類比し、その社会的紐帯の維持・再編過程を追うことによって移民研究の応用例として新たな地平を開いたことが本研究の学術的意義と言えよう。また、本研究は、被災者が実際に経験した様々な社会的紐帯のありようを具体的に提示しており、それは今後また起こる大規模自然災害時において、被災者自身にとっても支援側にとっても役に立つ参照事例となろう。

研究成果の概要（英文）：This study repeatedly interviewed the victims of the Great East Japan Earthquake about their life histories before the disaster and the process of rebuilding their lives afterward. It individually and concretely traced the dynamics of how the victims maintained, regenerated and reorganised their social ties in the course of their lives after the tsunami, which uprooted their previous livelihoods and forced them to relocate several times. The study also identified several typical patterns or typologies in these dynamic processes.

研究分野：文化人類学

キーワード：東日本大震災　津波　被災者　移住　生活再建　社会的紐帯

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、2012 年度から科研費を得て行った「被災地の民族誌－東日本大津波の被災者とそのコミュニティに関する人類学的研究」に続く調査研究である。先の研究は、東日本大震災の被災地を津波が生み出した、日常的には体験できない局地的異文化として捉え、被災者と彼らをとりまく環境や活動を被災地独自の文脈で理解し、民族誌的に記述しようと試みた。しかし、当時は被災地の現況や再生・復興プロセスをコミュニティ（集落）単位で捉えようとする偏りが調査者側にあったように思う。もちろん、聞き取り調査などは被災者一人一人に行ったわけだが、それを整理・分析する中でコミュニティの再生や変容といった切り口で記述してしまいがちであった。だが、被災したのはあくまで集落に住む個々の住民である。コミュニティの変容を論じるにしても、その基礎をなす成員間の社会的紐帯の維持・再生・変容を明らかにしなければなるまい。しかも、被災者は一時的にせよ恒久的にせよ集落から離れて、何度かの移動を強いられており、その過程で社会的紐帯のありようも変化しているはずである。それを明らかにする最も有効なアプローチとして移民研究を応用できないだろうかと考え、本研究に着手した。

２．研究の目的

津波のような大規模自然災害によってこれまでの生活基盤を根こそぎ奪われた被災者は、どのようにしたら豊かで意味のある生活を再建できるのだろうか。その答えを探るべく、本研究は、もとの集落からの移住を迫られた被災者の社会的紐帯に注目し、移動を重ねる間に彼らがその社会的紐帯をどのように維持・再生・再構成していったのか、その動態的なありようを中長期的なスパンの中で具体的に明らかにすることを目的とする。また、その社会的紐帯の動態的なありようをいくつかの典型的なパターンもしくは類型に分類することで、今後また起こるであろう災害時に被災者がたどり得る生活再建プロセスにおける社会的紐帯のモデルをいくつか提示することを目指す。

３．研究の方法

本研究の調査地は、東日本大震災で甚大な津波被害に遭った石巻市の、内陸部に整備された、大規模な復興住宅団地（二子団地）と、個別に自力転居した被災者の移転先である。入居する被災者は、主に石巻市の旧河北町の一部地域と旧雄勝町の元住民である。彼らはみな日常の生活基盤を津波に奪われ、その後幾度も被災地周辺で移動を余儀なくされていた。そこで本研究では被災者のローカルな移住過程を、①震災前の集落での暮らし　／　②避難所もしくは避難先での暮らし　／　③応急仮設住宅やみなし仮設での暮らし　／　④復興団地や自力転居した住居などの新居に入居した後の暮らし、という４つのフェーズに便宜上分けて（人によっては４つの局面すべてを経ていない場合もある）調査を行った。具体的には、それぞれのフェーズごとに被災者が有していた社会的紐帯のありようを一人一人個別に聞き取っていく。その際に研究代表者が過去に行った、在日コリアン一世や脱北者の定住過程と社会的つながりに関する移民研究の成果を援用しながら、どのような状況で、どのような転機に、どのような選択を行うことで、社会的紐帯が解消したり、変容したり、新たに結ばれたりしたのかを丹念に調査した。

４．研究成果

本研究成果報告では、津波の被災者が経験した社会的紐帯の動態的なありようをいくつかの類型に分けたものだけを記載する。紙幅の関係で割愛した類型もいくつかあるが、調査対象の被災者の全体像をおおまかに理解するのに必要なものは残せたと考えられる。

【非常時リーダー】　非常時リーダーとは、その名の通り、被災前の平時には集落の平凡な成員であったのが被災後の非常事態の中で頭角を現し、避難所や仮設住宅においてリーダーの役割を果たすようになった人物である。そのほとんどは男性で、集落の一員として平均的な役割を果たし、周囲の人々とごく標準的なつながりを保っていた。震災が起こり、地元の顔役やリーダー格の人物が亡くなったり、失意に暮れたりする中で、支援物資の配給作業や避難所の雑用・運営などを自発的に携わるうちに彼らは自然とリーダー的存在になっていった。さらに被災地の外から支援に訪れたボランティアや取材に訪れたマスコミ関係者に対する対応を引き受けることで、その役割は確たるものとなっていった。この地区のことはあの人に聞けとばかりに外部から人が押し寄せる状況も生まれた。そのうちに、行政区の区長に選ばれる人も出てきて、名実ともに集落の代表になったケースもあった。だが、被災地の復興に一定の目途がつくと、外部からの支援や取材は急速に減っていった。また、それと相前後してリーダーの役割も他の人にとってかわられた。外部と密に付き合ったおかげで「いい目を見た」と周囲から冷ややかに見られることもある彼らは、聞き取り調査に「近頃は寂しいね」と答えている。

非常時リーダーには共通した特徴が見られる。その一つは、配偶者や一親等の家族に津波の犠牲者がいないということである。再建に向けて前を向きやすかったといえよう。もう一つは、彼らが「新参者」であるという点である。被災地一帯では昔から、４代くらい続いても新参者とされるほど、古い家であること、長く住んでいることに価値が置かれ、何かにつけてその序列が意

識されてきた。非常時リーダーが区長に選ばれたとき、平時では考えられないような人選だと異を唱える声が聞かれたのも、彼らが新参者であったからだ。

【被災上昇型】　大津波によって漁業や養殖業が壊滅的な被害を被った集落には、被災したことによってかえって水揚げ高や販売量を増やし、経済的上昇をとげた人々がいる。彼らの多くもまた新参者で、集落内の地縁や血縁も薄く、村落内での序列も下に見られていた。そのため震災前は様々な点で割を食うことが多かった。非常時リーダーと同様に彼らも家族に犠牲者がいなかったため、避難所に入っている時から生業の再開に向けて準備を進め、他に先んじて操業を再開している。その時に大いに力になったのが、外部から入ってきた支援ボランティアたちである。ボランティアたちは事業再開や操業を現場で手伝ったり、県外での水産品の特設販売を段取りしてくれた。そうした外部からの協力関係をいち早く取り込み、その後も交流を深める中で、水産物の直販ルートを広げたり、共同で新たな水産事業を立ち上げたりすることにもつながった。その結果、集落内での売上高の序列が逆転する現象も起きている。

　彼らの多くに共通するのは、被災と同時に、実質的な働き手となってくれる子どもたちが外での仕事を辞めて戻ってきてくれていることである。ある人は「ボランティアがいてくれても自分たちだけでは何ともならなかったろう」と述懐している。ボランティアとの交流も、その後のSNS等を駆使した宣伝活動も若い世代がいればこそだった。しかし、若い頃から集落外に出て仕事に就いた次世代は、集落内の付き合いも薄く、暗黙の約束事などには無頓着である。そのようなものは自分たちの事業拡大に邪魔になるだけと考えた節があり、時にそれは周囲との軋轢を生み、トラブルを生じさせた。また、生業の再建や拡大に力を注ぐあまり、仮設住宅などでの近所付き合いは手薄になりがちで、元々浅めであった集落内の付き合いまで切れてしまうこともままあった。助け合いを是とする被災者の暮らしにおいて、中にはやや強引な手を用いる人もいて、彼らの地元での評判は芳しくない。

　非常時リーダーと被災上昇型には共通する特徴がある。どちらも集落内では新参者であり、本家のように長い時間をかけて作り上げた広く重層的な社会的紐帯を持っていない。しかし、被災後に支援や取材のために外部からやってきた人々との間にいち早く社会的紐帯を結び、一挙に社会的紐帯の広さと厚みを増すことに成功し、その恩恵にあずかっている。とはいえ両者には決定的な違いもある。その一つは、集落での社会的紐帯を維持したり再生させようとするスタンスの有無である。非常時リーダーはあくまで集落のリーダー役であるのに対し、被災上昇型の人々にとって集落は二の次であり、以前の社会的紐帯が解けていくことには無関心だった。もう一つの違いは、外部の人々との社会的紐帯の持続性である。非常時リーダーの場合、それは一過性のものであり、かりそめの社会的紐帯であった。一方、被災上昇型の場合、それは持続的なものであるばかりか、維持・構築し続けるべき社会的紐帯なのである。

【従前維持型】　被災してからも社会的紐帯にあまり変化のない人々もいる。彼らは避難所にいたときも、仮設住宅に入居した後も、自分の方からすすんで新しい付き合いを求めたりはしなかった。外部からやってきたボランティアらの支援を拒みはしないものの、積極的に交流を深めるようなことはしない。彼らは、あまり多くを望まないように見える。もちろん、仮設住宅や復興団地などでお隣さんになった人々とは当たり前の流儀としてご近所付き合いはしている。しかし彼らの付き合いのベースは、被災後も変わらずもとの集落にある。被災前と同じようにとはいかないものの、出来る範囲で以前の人間関係や付き合い方を維持したい。その思いをわかりやすい形で見せてくれるのが「裾分け」である。都会と違って地方の集落では今でも裾分けの慣習が日常的に行われている。被災前の各集落でも、自分たちが獲った魚介や収穫した野菜をまるで物々交換するかのように裾分けし合っていた。海も畑も家々の近くにあったからだ。仮設住宅や復興団地に入居すれば、裾分けも難しくなってくる。しかし、この従前維持型の人々はめげない。例えば、生業を復活させた高齢の漁師は市場に出した残りを付き合いのある集落の家々を回って裾分けする。もらった人はまた別の機会にお返しをする。何もない場合は、おかずを余計に作って持っていったりする。裾分けのやりとりが変わらぬ社会的紐帯の証となっているのである。

【居娘型】　居娘というのは、きょうだいに男子がいないため婿養子をもらって家を継いだ女性のことである。彼女らは、代々続く家が集落内で維持してきた家同士のつながりや様々な権利を継承しており、例えば家の生業の手伝いを同じ集落内の女性たちに割り振って、現金収入を得させるといった互酬関係を築いていた。長年にわたって培われてきたそうした関係は被災後も消えることがなかった。居娘たちは避難所でも仮設住宅でも孤独とは無縁な暮らしを送ることができた。復興が進むにつれ、居娘たちは集落内での協力関係を活かして生業の建て直しを図ったり、新たな移転先で昔のような「お茶っこ」（地元の親しい者同士が日常的に行う茶話会のようなもの）を開いたりして、被災前とさほど変わらない暮らしを送っている。

　この居娘型と一つ前の従前維持型とは非常によく似ている。ほとんど同じと考えてもよいのだが、居娘型は従前維持型の女性特化版であり、次の被災解放型との比較のために用意したものである。いずれにせよこの二つの類型は、被災前からの社会的紐帯の維持・再生（様々な理由でその範囲や深さは減じているが）で一貫するパターンを示しており、新たな社会的紐帯の構築にはほとんど関心を持たない。ボランティアによる支援を受けたり、仮設住宅におけるコミュニティ活動に参加することはあっても、よほどのことがない限りその先には進まないのである。おそらく集落で暮らしていた時からそうだったのだろうが、すでにある社会的紐帯で充足していると考えられる。

【被災解放型】　被災地の集落での結婚は、村内婚も一部では行われていたが、たいてい集落の

外からお嫁さんが入ってくる形であった（婿養子を取る場合も同様)。集落外から嫁ぐということは移住と言ってもよかろう。そのため嫁いだ女性たちは、集落内で新たに社会的紐帯を結び直さなければならなかった。そしてその成否は、当たり前のことだが、彼女たちのその後の暮らしに大いに影響を及ぼした。

どのような社会的紐帯を結び直していくかは、嫁いだ先の家の状況や夫婦のあり方等によってバリエーションがある。格式ある本家のようなところに嫁げば、時間をかけて張り巡らされた人間関係の大きな網の目に必然的に繋ぎ留められていくことになる。そう聞くと窮屈そうに感じられるが、工業化の波が石巻にも及んだ時期からのお嫁さんたちには、別の通路が用意された。被災地の周辺でも、半世紀ほど前から女性たちが域内に出来た電子部品工場や服飾工場の他、石巻市内の水産加工場などに送迎バスで通うことが増えてきた。工場内や行き帰りに話に花を咲かせて、主婦たちは息抜きをしながら集落内での横のつながりを深めた。むろん、家の生業の手伝いもあって忙しかったが、家事や子育ては姑に任せることもできた。（工場に勤めない主婦たちも何らかの仕事に就くことの方が多かった。）

被災後、そうした付き合いはひとまずリセットされたかのようである。よほど気の合った同士は、今に至るまで仲良く付き合いを続けているが、そうでもなければ繋がりは薄くなる一方である。たまたま同じ集落に暮らすことになった嫁という部外者同士のつながりには限界があるのかも知れない。実際、集落の外に出た主婦たちは、学生時代の友人との付き合いを再開させたり、同じ趣味の仲間とのつながりを大切にするようになっている。

また、主婦たちからしばしば聞かれたのは、震災で集落の行事や親戚の集まりといったものがなくなったり減ったりしてほっとしたとか、付き合いが軽くなって楽になったといった声である。震災が女性たちを集落の圧力や軛から解放したのかも知れない。

津波で夫を亡くした女性の事例は最も際立ったものであろう。彼女は本家に嫁ぎ、本家の嫁としての付き合いや役割を着実に果たし、外でも会計の仕事をこなし、立派に子どもを育て上げたところで震災に遭う。夫を亡くし、子どもは遠方の大学に通っていた。最初は一人になって気落ちしていたというが、仮設住宅に入ってから彼女はこれまでの職歴を活かして、ボランティア活動に会社勤めにと精力的に活動し始め、次々に新しい付き合いの幅を広げていった。その姿はあたかも今までのしがらみを脱ぎ捨てて、自由な一人の女性として生活を作り直しているかのようである。

集落の外から嫁に来た女性たちは、居娘とは立場が 180 度異なるためか、その社会的紐帯のありようも逆転したパターンを描き出す。彼女らは被災を機に、押し付けられた付き合いや無理をして保ったつながりなどからひとまず自由になった。その程度は人それぞれだが、集落にいる限りはつきまとう社会的紐帯を取捨選択できるようになったのである。その分だけというわけではないが、仮設住宅から復興団地へと生活再建が進む過程で、これまで眠らせていた昔の社会的紐帯を甦らせたり、新たな社会的紐帯を自分の裁量で構築したりし始めた。集落の内外を問わずに新たな社会的紐帯を模索する道を力強く歩む人も現れている。もちろん集落に嫁いできた女性のすべてがこの被災解放型に属するわけではない。だが、ひとたび解き放たれた彼女らが、その社会的紐帯のありようを逆戻りさせることはないだろう。

【自力転居者】　避難所から仮設住宅に移り、行政が造成する復興団地の完成を待って移転するというのが、被災者がたどる最も長い移動コースであるとすれば、自力転居者は、その途中のどこかで自力で移転先を見つけた人々である。同じ集落の人が何人もいるので安心するという復興団地入居者の思いを共有しつつ、自らもその輪に加わりたいと思いつつ、例えば高齢の母親と義母との同居を早期に実現するために復興団地の完成を待てないとか、条件の良い空き家を優先的に紹介してもらえたといった事情で新居への移転を急いだ人がほとんどである。もともと集落内でけっして孤立したり周囲との関係が悪かったわけでもない。避難所でも仮設住宅でも集落の人々や新たなご近所さんと円滑な付き合いを保っていた。だから、復興団地に入居できないことを後ろめたく思う気持ちもあったという。

この類型の人々には共通する特徴がある。それは、ほとんどの家長が集落の外に出て仕事をしていたという点である。大手企業の仙台支社に勤めながら週末には生まれ育った集落に戻って水産関係の家業を手伝うとか、夫は高校の教師として県内を転々としながら妻子は集落で暮らすといった具合に、集落外に仕事の軸足を置きながら、そうかといって集落から抜け出してしまうこともなく、家同士の付き合いや集落の行事等にはまめにコミットしていた。集落の外部と内部に同時に社会的紐帯を維持するのは骨が折れたかもしれないが、その経験は彼らの生活再建に大いに役立つことになった。

彼らの移転先は、内陸部の古くからある集落であったり、郊外の新たな造成地であったりするのだが、いずれにせよ全く付き合いのない土地に移住するわけである。しかし、彼らは知り合いも親戚もいない土地に移り住むことに何の躊躇もなかった。すでに経験済みのことであるし、都市部の互いに無関心な人間関係よりはずっと集落のそれに近いものが期待できたからだ。しかも、彼らやその家族は集落のしきたりや付き合い方も当たり前のこととして身についている。古い集落に入ろうと、造成地に生まれる新たな町内だろうと何の心配もなかったと彼らは言う。実際に彼らは移転先で集落の流儀（例えば隣近所と互いに裾分け、集団清掃等の集まりに率先して参加、祭りなどの行事の手伝いに尽力、町内会の役員等を快諾など）をごく普通に行っていくうちに、町内会長に選出されたり、お祭りの運営役員を依頼されるまでになっている。面白いことに、彼らはもともとの集落との関係を今も大切にしている。集落でのお祭りには必ず参加してい

るし、社寺の草刈りなどにも顔を出し、人々との付き合いを維持し続けているのである。
　ただし、自力転居者だからと言ってすべての人が順風満帆なわけではない。他の自力転居者と同様に家長が集落の外に出て働いていても、集落での役割や付き合いをないがしろにしてきた家は移転先で孤立したりして苦労するケースが多い。いっそのこと仙台市のような都市部に移転すれば良かったのではと思えるのだが、それぞれにやむにやまれぬ事情があり仕方がなかったようだ。
【早期自力転居者】　同じような自力転居組でも、被災から間もない時期に被災地を離脱した人々は、異なった経験をしている。厳密にいえば今回の調査対象には含まれない人々であるが、数的には多数派でもあるので、比較対照のために少し触れておく。
　早期自力転居者とも言うべき彼らは、避難所にいる間から石巻市内の新興住宅街や親戚の家の敷地などに住宅を再建したり、一家で仙台市内に引っ越したり、県外の縁者を頼って遠くに移り住んだりしている。場合によっては、若い世代だけ仙台市内に引っ越して老親は仮設住宅に入るケースもある。いずれの場合も、早い段階から故郷の集落に見切りをつけており、そこでの人間関係や付き合いをいったん棚上げして、まずはなるべく条件の良い移住先に落ち着くことを最優先にしていた。こうした傾向は、津波の人的被害が大きかった集落に特に顕著なのだが、無理もないことである。親族や親しかった知人をあまりにも多く失って、住み慣れた土地も見る影もないほどに変貌してしまったのだから。ただ、そうやって混乱の中で移転してしまったしわ寄せは、付き合いの消滅という結果を生みやすかった。早急でバラバラな移転であったため集落の人々の移転先が互いに分からなくなり、非常時リーダーがお盆の時期に連日お墓に通って墓参りに来る住民に片っ端から転居先を聞くことをしなかったならば、その後の行政的な諸手続きは大幅に滞ったことだろう。
　それでも、それぞれの生活がある程度安定し、地域全体の復興が進み過程で、集落でのつながりを出来る範囲で取り戻そうとした人々も中にはいる。しかし、大勢としてはこの集落のつながりの解体は不可逆的であったと言えよう。被災地全体の中でも一番早くに自治会を解散したのがその証左である。元住民らが集う数少ない機会である合同慰霊祭も参加する人が年々減少している。
　早期自力転居者の移転先での暮らしぶりについては、調査があまり出来ていないのではっきりとしたことは分からない。それでも何人かから聞き取りをした限りでは、移転先の集落でうまく根付いている人もいれば、社会的紐帯を新たに構築できず、かといって以前からの社会的紐帯を再生する機会も手段も見つからず、付き合うのは親戚だけという人もいた。仕方のないことではあったろうが、あまりにも性急な移転はリスクが高くなる。
　それに対して時間をかけて自力転居を進めた人たちは、集落内での社会的紐帯を維持しつつ、各人の事情に合わせて最適な選択をしているように見える。集落外で新たな社会的紐帯を構築した経験を持ち合わせていたことも、見知らぬ土地への自力転居にはうってつけだったろう。ただ、集落の中で培われた社会的紐帯とそれを保守するための労をいとわないでいたことがもたらした恩恵はやはり大きかったろう。集落の内と外、その両方で社会的紐帯を維持・再構築していけた自力転居者は、社会的紐帯のありようという面では被災者の中で最も安定した生活を再建したと言える。
【集落お祭り組】　最後に、これは典型的な社会的紐帯のありようではけっしてないのだが、非常に注目すべき特徴を有するグループの事例を取り上げたい。
　被災地のある集落では、年に３回の神社の祭りを筆頭に、社寺の年始参りや掃除、共有地の草刈り等の行事があった。たいていは班ごとに順番で毎年担当が変わり、負担の均等化が図られていた。しかし、一部の男性住民は祭事に必要な太鼓や笛の練習で頻繁に会合を重ね、また別の住民たちは祭りの雑用を引き受ける組織を作って祭りの前後に会合を重ねていた。二つのグループは一人を除いてメンバーがかぶることなく、別々に行動するのが常であった。震災が起き、両グループの中心的人物が津波で亡くなり、残されたメンバーたちは避難所に身を寄せて行方不明者の捜索活動などを協力して行うことになった。もともと同じ集落で知り合いだったり幼馴染や先輩後輩だったりした関係もあって、彼らはグループの垣根を越えてまとまるようになる。どちらのグループも集落の祭りを盛り立てることを目的にしていたため、仮設住宅に移り住むようになるとすぐに祭りの復興を目指して活動を始め、周囲の人々を巻き込んでいち早く祭りの華である「お神楽」を仮の舞台で奉納することにこぎつけた。祭りの部分的復興は集落の人々をまとめる求心力を生み出したようで、このグループを中心に集落の人々は結束して、新たにできる復興団地への集団移住を計画的に進めることになった。復興団地に入居した被災者のうち、この集落出身の人々が一番多いのはこのためである。グループのメンバーは元の集落でのお祭りの復活を成し遂げると同時に、復興団地でも町内会の役員を務めたり、毎月の清掃活動、盆踊りやクリスマス会といった催しを企画運営し、移住先でのつながりを生み出そうとしている。
　集落お祭り組とも呼ぶべきこのグループは、上述の非常時リーダーに近い役割を演じたわけだが、その際に外部との社会的紐帯を必要としていない。集落で自然発生的に生まれていたグループが被災によって内部から浮き上がるように現れ、お祭りの復興を起点にして、ほどけていきそうな人々の社会的紐帯を再生・再構築していった。祭りが社会統合機能を失っていない集落だったからこそ可能だったことだろうが、集落お祭り組の人々が今後どのように地域の社会的紐帯を構築していくのか、引き続き注目していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 小西賢、李仁子	４．巻 第69集第2号
２．論文標題 韓国浦項地震における震災移住に関する研究	５．発行年 2021年
３．雑誌名 東北大学大学院教育学研究科年報	６．最初と最後の頁 45-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

１．著者名 佐藤悦子	４．巻 17号
２．論文標題 被災地における手しごとの場をめぐる関係性ー田老地区での支援に着目して	５．発行年 2018年
３．雑誌名 関係性の教育学	６．最初と最後の頁 41-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 李仁子
２．発表標題 東北地方における災害研究手法の検討
３．学会等名 東アジアと自然災害研究会2020年度第１回研究会（Zoom）
４．発表年 2020年

１．発表者名 金谷美和
２．発表標題 人々が被災後に依拠した紐帯について――インド西部地震の事例から
３．学会等名 東アジアと自然災害研究会2020年度第２回研究会（Zoom）
４．発表年 2020年

１．発表者名 李仁子
２．発表標題 被災地の社会的紐帯とその変化―葬祭の社会的紐帯を事例に
３．学会等名 東アジアと自然災害研究会2020年度第３回研究会（Zoom）
４．発表年 2020年

１．発表者名 李仁子
２．発表標題 「村社会」の災害の到来
３．学会等名 東アジアと自然災害研究会2020年度第４回研究会（Zoom）
４．発表年 2020年

１．発表者名 李仁子
２．発表標題 災害時の家族のエスノグラフィー―核家族から拡大家族への移行
３．学会等名 東アジアと自然災害研究会2020年度第５回研究会（Zoom）
４．発表年 2021年

１．発表者名 李仁子
２．発表標題 災害常襲地・東北地方における年功序列組織と親族組織
３．学会等名 東アジアと自然災害研究会2020年度第６回研究会（Zoom）
４．発表年 2021年

１．発表者名
李仁子

２．発表標題
被災地の社会的紐帯のフィールドワーク

３．学会等名
東アジアと自然災害研究会2020年度第７回研究会（Zoom）

４．発表年
2021年

１．発表者名
李仁子

２．発表標題
津波被災直後の3日間－被災4集落の被災状況とその後の比較検討

３．学会等名
日本自然災害学会第39回学術講演会（Zoom）

４．発表年
2021年

１．発表者名
李仁子・金谷美和

２．発表標題
紐帯の強化、紐帯の断絶－外部からの被災地復興支援のあり方をめぐって

３．学会等名
日本文化人類学会第53回研究大会

４．発表年
2019年

１．発表者名
李仁子

２．発表標題
A Contemporary Japanese Perspective of Korean Studies

３．学会等名
Status of Korean Studies in East Asia: China and Japan（招待講演）

４．発表年
2019年

１．発表者名
金谷美和

２．発表標題
大規模自然災害後の集団移転と「社会変化」――インド西部地震被災地の事例から

３．学会等名
日本文化人類学会第52回研究大会

４．発表年
2018年

１．発表者名
二階堂裕子

２．発表標題
外国人技能実習生の帰国後の就労をめぐる現状と課題―ベトナム人技能実習生を事例に―

３．学会等名
第76回西日本社会学会大会

４．発表年
2018年

〔図書〕　計10件

１．著者名 金谷美和	４．発行年 2020年
２．出版社 フィルムアート社	５．総ページ数 19
３．書名 『現代手芸考――ものづくりの意味を問い直す』「手芸がつくる「つながり」と断絶」	

１．著者名 金谷美和	４．発行年 2021年
２．出版社 昭和堂出版	５．総ページ数 4
３．書名 『躍動するインド世界の布』「ナラティブ・テキスタイル――刺繍で表す被災経験の語り」	

1．著者名	4．発行年
金谷美和	2021年
2．出版社 有斐閣	5．総ページ数 19
3．書名 『文化人類学のエッセンス：世界をみる／変える』「自然災害」	

1．著者名	4．発行年
金谷美和	2021年
2．出版社 春秋社	5．総ページ数 27
3．書名 『インド・剥きだしの世界』「災害復興と宗教的マイノリティ――2001年インド西部地震の事例より」	

1．著者名	4．発行年
金谷美和他	2020年
2．出版社 Lexington Books.	5．総ページ数 305
3．書名 ” Weaving Knowledge in Depopulated Communities: Conservation of Wisteria Fiber Textiles in Kyoto, Japan ”	

1．著者名	4．発行年
李仁子	2018年
2．出版社 時事ジャーナル	5．総ページ数 2
3．書名 時事ジャーナル1517【韓国に知られてない日本の文化】（日本の伝統文化の継承の風景２ー丹後の藤織講習会と仲間づくり）	

1．著者名 李仁子	4．発行年 2018年
2．出版社 時事ジャーナル	5．総ページ数 2
3．書名 時事ジャーナル1515【韓国に知られてない日本の文化】（日本の伝統文化の継承の風景１ー丹後の藤織）	

1．著者名 李仁子	4．発行年 2018年
2．出版社 時事ジャーナル	5．総ページ数 2
3．書名 時事ジャーナル1508【韓国に知られてない日本の文化】（日本の伝統風習ーお盆）	

1．著者名 李仁子	4．発行年 2018年
2．出版社 時事ジャーナル	5．総ページ数 2
3．書名 時事ジャーナル1472【韓国に知られてない日本の文化】(リーダーを喪った長面の人々の向き合い方)	

1．著者名 金谷美和	4．発行年 2018年
2．出版社 京都大学学術出版会	5．総ページ数 27
3．書名 『トラウマを生きる』「大きな物語に抗する――災害の経験と記憶」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	金谷　美和 (KANETANI Miwa) (90423037)	国際ファッション専門職大学・国際ファッション学部・准教授 (32828)	
研究分担者	二階堂　裕子 (NIKAIDO Yuko) (30382005)	ノートルダム清心女子大学・文学部・教授 (35305)	
研究分担者	佐藤　悦子 (SATO Etsuko) (70749415)	東北大学・教育学研究科・博士研究員 (11301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関